

経験的な語りと人間形成論をつなぐービオグラフィ・インタビューの 意味形象の再構成を通じた反省的ー規範的人間形成論の探究

野平 慎二

学校教育講座 (教育学)

Vermittlung von Bildungstheorie und empirischer Erzählung: Eine Untersuchung über die reflexiv-normative Bildungstheorie durch Rekonstruktion der Sinnfiguren eines autobiographisch-narrativen Interviews.

Shinji NOBIRA

Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

この論文の目的は、「人間形成論的に方向づけられたビオグラフィ研究」(bildungstheoretisch orientierte Bio-graphieforschung; BOB)における経験的な語りと人間形成論との媒介のあり方を探ることである。

現代ドイツ教育哲学におけるBOBは、現実との関わりを問わない規範的な人間形成論と、規範や目的を問わない経験的な人間形成研究をともに批判し、経験的なインタビュー・データを質的に分析するというアプローチによって人間形成論と人間形成研究の媒介を図ろうとする。他方、BOBにおける媒介の試みに対しては、経験的事実から規範を導き出すことはできないという古典的な指摘をはじめとして、いくつかの検討すべき論点がなお含まれている。

この論文ではまず、BOBにおける理論と経験の媒介の試みとその検討点を整理し、ありうべき有意義な媒介のひとつとして、H.-R. ミュラー (Hans-Rüdiger Müller) が提起する「反省的規範性」(reflexive Normativität)を視野に入れた人間形成論を取り上げる(1)。続いて、その理論と方法論を踏まえて、ある若者のビオグラフィ・インタビューの分析を試み(2)、最後に、その分析から示唆される、BOBにおける人間形成をめぐる理論と経験との媒介のあり方について検討する。(3)。

1. BOBにおける理論と経験の媒介

(1) コラーの「変容としての人間形成過程の理論」

現代ドイツ教育哲学のBOBでは、その代表的な研

究者であるH.-Chr. コラー (Hans-Christoph Koller) の「変容としての人間形成過程の理論」(Theorie transformatorischer Bildungsprozesse)が広く基礎に置かれている。まず、この理論について確認しておきたい¹⁾。コラーは自らの理論を展開するにあたり、W. v. フンボルトの古典的人間形成論に依拠する。コラーによれば、フンボルトの人間形成概念の要点は次の点に求められる(Koller 2012: 12)。すなわち、①世界との自由な相互作用を通じた、②諸力の全面的、調和的な発達、という2点である。また、世界との自由な相互作用ということで考えられていたのは、異なる言語ないしは異なる世界観との相互作用である。すなわち、自らとは異なる言語との相互作用を通して自らの世界観が問い直され、世界との関わりが新たに構造化される点に、人間形成の契機が求められた。このようなフンボルトの人間形成論は、一方で人間形成の理念を明示し、経験的現実を批判する根拠を提供する点で大きな意義をもっていたと評価される(Koller 2012: 10)。しかしながら他方では、人間(人類)の諸力が最終的に調和的な完成に向かうと想定されている点、言い換えれば価値の多元性や非合意の契機が十分に考慮されていない点、および経験的研究との結びつきが不十分である点において、時代的な制約を免れていないとされる(Koller 2012: 14f)。

その上でコラーは、R. コケモア (Rainer Kokemohr) の理論に着想を得ながら、人間形成を「世界関係と自己関係の形態 (Figur) の根本的な変容」として捉える「変容としての人間形成過程の理論」を構想する。この構想は、人間形成を自己と世界との関係の根本的な変化とみなす点、ならびに変化の過程を

言語論的観点から捉える点においてフンボルトを継承している。また、人間形成過程のきっかけ—それは「危機の経験」、すなわちそれまでの枠組みでは十分に克服されない問題状況に直面することである—を明示している点、ならびに人間形成過程に対する経験的な探究に結びつくことができる点において、フンボルトを超え出ているとされる (Koller 2012 : 16)。さらに、カラーによれば人間形成過程の探究の前提として次の2点が挙げられる。①人間形成過程は客観的な所与ではないため、質的ないしは意味解釈的な研究方法によって探究されるべきものであること。②人間形成過程は長期にわたって生活史の展開の文脈のなかで進行する出来事であり、それを経験的に解明するにはバイオグラフィ的方法が適していること。以上のような前提のもと、BOBでは、経験的な素材であるバイオグラフィ・インタビューを手がかりとして、人間形成の様相の再構成と人間形成概念の再検討が試みられている。

(2) BOBにおける理論と経験

ところで、BOBにおける理論と経験の関係についてはさまざまな観点から議論されているが、典型的な疑問は次のようにまとめられる (Koller/Wulfstange 2014 : 9)。

a) すでに前提とされている理論的な構想を描き出すために経験的素材を役立てるだけでなく、理論的な構想のさらなる展開のために経験的素材を役立てるような仕方では理論と経験を相互に結びつけることは、BOBのアプローチの枠組みにおいてはいかに可能なのか？

b) 人間形成概念の規範的含意は、BOBのアプローチの枠組みのなかでいかに適切に考慮されるのか？ そのアプローチは、純粋に記述的な人間形成 (過程) の概念の解明に課題を限定するのか？あるいはそれにとどまらず、人間形成 (過程) を世界関係と自己関係の<望ましい>変容として、より詳細に質的に規定するのか？

このうち、第一の問い (a) は、BOBは研究者が予めもっている人間形成論を経験的インタビューのなかで再確認するにとどまるのか、それとも経験的なデータにもとづいて人間形成論を更新ないしは新たに確立することが可能なのか、という形で言い換えることができる。たしかに、純粋に思弁的な人間形成論とは異なり、バイオグラフィ・インタビューという経験的データを素材とする点で、BOBは理論と経験との媒介に着手している。けれども、経験的データが単に理論の裏付けとして用いられるだけであれば、経験的データによって理論が更新されることはない。あるいはこの

第一の問いは、理論の普遍性と経験の個別性の関係をめぐるとしても捉えることができる。すなわち、バイオグラフィ・インタビューという個別的な経験的データの質的分析の結果を、人間形成論として一般化できるのか、という問いである。このような第一の論点に関して、Th.フックス (Thorsten Fuchs) は、理論の更新や確立、あるいは個別的経験の一般化という形で理論と経験を媒介することはできないとする立場に立つ。それは、経験的研究に必要とされる概念やカテゴリーは、経験的研究に先立って理論的に基礎づけられている必要があり、「媒介の規準自体がすでに理論の言葉で捉えられているから」 (Fuchs 2011 : 130) である。これは、観察の理論的負荷性というN.R.ハンソンのよく知られたテーゼにも通じる理由であろう。カラー自身の研究も、危機の経験を通じた変容がインタビューでの語りのなかでどのような形で含まれているのかを探ることにもっぱら関心が置かれており、経験的な語りにもとづく人間形成概念の更新やインタビューの分析結果の一般化は重視されていない。カラーは、最終的な審級としての支配的な言語ゲームの不在を指摘するJ.F.リオタールを踏まえつつ、現代のラディカルな価値多元性のもとでは、「抗争を認識し抗争に対して開かれた態度を取るために必要となる、新しい言語ゲームが生じる過程として人間形成を捉えること」 (Koller 2012 : 97) が重要であると述べる。カラーにおいては、普遍的で何らかの内容を備えた人間形成概念を提示することよりも、きわめて形式的な人間形成概念に従って個別の経験的な語りを分析し、その複数性を提示することに人間形成論の役割が求められていると言えるかもしれない²⁾。

(3) BOBにおける事実と規範

第二の問い (b) は、規範的な人間形成論と経験的な人間形成研究の媒介の可能性について問うものである。「はじめに」でも触れたとおり、事実から当為を導き出すことができないという考えは、D.ヒューム以来、倫理学の一般的な前提とされてきた考えであり、BOBにおいても事実から当為を導き出すという意味での媒介が試みられているわけではない。カラーもまた、現代における価値の多元性を前に、規範的な内実を備えた人間形成概念を提示することよりも、もっぱら「どのように人間形成が生じているのか」という問いに自らの課題の重点を置いている。もっとも、すべての世界関係と自己関係の変容が望ましい人間形成と見なされているわけではない。カラーは、人間形成の特徴を「世界関係と自己関係の反省性と複雑性の増大」に求めるW.マロツキや、経験の不断の再組織化を教育の目的と見なしたデューイにならって「さらなる変容へと開かれていること」に求めるA.M.ノールの議論を参照しつつ、「抗争に正しく対処できるようにな

ること」を望ましい人間形成と見なす (Koller 2016)。「人間形成と呼ばれるにふさわしいのは、[...] すでに明確に言語化されている抗争を保持し続け、未だ明確に言語化されていない関心事を言語化するのに適しているような変容に限られるだろう。反対に、異質な言語ゲームを沈黙させることを目指すような世界関係と自己関係への変容、例えば異なった考えをもつ者の排除や抑圧や封殺を目的とした全体主義的な立場への変容は、除外されるだろう」(Koller 2016 : 159)。このようにしてコラーは、人間形成概念の規範性と現実批判の根拠としての役割を保持しようとする。

このようなコラーの人間形成概念を、なお形式的なもので見なし、より実質的な規範性を提示しようとするのはフックスである。フックスは、K.マイヤー (Kirsten Meyer) の議論を援用しつつ、自己規定を人間形成の不可欠の要素と見なし、その核心を「批判的反省性」(kritische Reflektiertheit) (Fuchs 2014 : 135) に求めている。それによれば、生において価値ありと見なされること、目標や願望、その根拠を批判的に問い直すことができる人間が自己規定の人間と捉えられる。批判的反省性は、必ずしも生の全体をつねに根本的に問うことではなく、個別の事例に即しつつ、その根拠を省察する姿勢を意味する。さらに、自らと異なる意見を検討し、十分に省察されていない受け売りの意見を退ける姿勢もそこに含まれる (Fuchs 2014 : 135f)。経験的現実との関わりについて言えば、経験的な語りのなかに「ものの見方の妥当性の検討、存在や当為との批判的な関わり、価値や規範の自明性の問い直し」(Fuchs 2014 : 136) といった批判的反省的な契機が見て取れるかどうか、という点が人間形成の規準となる、とされる。

コラーやフックスにおいては、事実と規範との関係が、当為としての人間形成論の立場から経験的現実の善し悪しを判断する、という仕方と考えられていることが見て取れる。規範的な人間形成論は経験的現実に対して、不適切な仕方では媒介されるのではなくむしろ距離を保つからこそ、経験的現実に対して批判的役割を果たすことができるーこの伝統的な事実と規範の二分法に、両者ともに立脚していると言えるだろう。これとは異なる観点から人間形成論のあり方を探るのが H.-R. ミュラーである。ミュラーによれば、BOB における規範的な視点は、経験的現実に対して外から当為を持ち込むという仕方ーもちろんこのような観点も重要なのだがーを取るまでもなく、経験的な語りのレベルでも、またそれを分析する研究実践のレベルでも、つねにすでに意識的ないし無意識的に作用している (Müller 2011 : 58ff)。すなわち、バイオグラフィの語り手はつねに何らかの価値判断を行いながら生活実践を行っており、バイオグラフィの研究者もまた分析枠組みの設定や分析方法の選定において何らかの規範に従っ

ている³⁾。したがって、「規範性の次元は理論、方法、そして実践のレベルで最初から構成的なものとして働いていることに注目すべき」(Müller 2011 : 68) であるとされ、そのような規範性のあり方をミュラーは「反省的規範性」(Ibid.) と名づけている。ミュラーによれば、このような規範性の構成的な作用を再構成して示すことが、BOB における生産的な事実と規範の媒介として捉えられる。

(4) 反省的ー規範的な人間形成論とその方法論的基礎

ここまで、BOB における理論と経験の媒介をめぐる議論を検討してきた。繰り返しとなるが、人間形成論は (一般性をもつ) 「理論」という側面と「当為ないしは規範」という側面をもつ。この二つの側面と経験的現実との関係をどのように捉えるかによって、各論者の立場の異同が現れる。まず、経験的現実から理論を導き出すという意味での媒介はどの論者においても考えられておらず、むしろ現実の把握と分析に先立つ理論的枠組みの妥当性を省察することが重要であると見なされる。次に、事実と規範との媒介をめぐることは、コラーやフックスの場合、あらかじめ理論的に構想された規範性を経験的現実にあてはめるという仕方での、言わば伝統的な関係づけが想定されているのに対し、ミュラーの場合、経験的現実や研究実践のなかですでに作用している規範性を明らかにするという方法が取られている。BOB もまたひとつの実践であり、研究対象を分析し、研究成果を公表するという行為遂行には何らかの規範性が必ず付随する。研究者の抱く規範性を視野の外に置き、事実と規範の二分法ないしは研究主体と研究客体の二元論を前提として臨む姿勢を問い直すこともまた、人間形成の質的解明を目指す BOB の重要な課題であるーこのような理由から本論では、ミュラーの「反省的規範性」という構想に依拠しつつ、そこからいかなる人間形成論を提示することができるのか、具体的なインタビューの語りの分析に即しながら探っていきたい。

なお、ミュラーが BOB の方法論の基礎に置くのは、P. リクルの解釈学である (Krininger/Müller 2012 : 66f; 2013 : 44f; 2014 : 80f)。リクルは、自然科学における「説明」と精神科学における「理解」の二分法に替えて、人間理解 (テキスト、行為、歴史等々の理解) における「説明」と「理解」の循環の重要性を指摘する。リクルによれば、テキスト理解における「説明」とは、自然科学的な因果関係を解明することではなく、「語ることー書き記すことー読み解くこと」という一連の言述 (ディスクール) のコードを明らかにすることであり、そのような「説明」を経ることでテキスト理解は素朴な理解から巧緻な理解へと達することができる (リクル 1985 : 24)。同時にリクルは、テキストの意味はその書き手 (語り

手)によって決定されるとする立場を退け、テキストの自律性と、テキストの意味構成におけるテキストと読み手との相互作用の重要性に注意を向けている(リクール 1985: 26)。また、よく知られているように、リクールは物語の産出と読解における三重のミメシスの循環を指摘した。すなわち、世界の先行理解(ミメシス I = 先形象化 prefiguration)、物語における出来事の筋立て(ミメシス II = 統合形象化 configuration)、物語の読解と意味構成(ミメシス III = 再形象化 refiguration)の循環である(リクール 2004: 99ff)。書き手(語り手)は世界の形象(Figur)を言葉で表現し、読み手は表現されたその形象を読み解く(ないしは、その意味を構成する)。私たちの存在は、否応なくこうした解釈学的循環のなかに組み込まれている、とされる。

このようなリクールの解釈学を踏まえて、ミュラーは、BOBにおけるインタビュー・テキストもまた、語り手と読み手の双方から相対的に自律した中間領域を形成するものであり、意味解釈的方法によってその意味形象(Sinnfigur)が解明ないしは構成されるべきものと捉える(Müller 2013: 46)。具体的なテキスト分析は、大きく、①テキストの意味内容の理解、②テキストの意味内容を、語り手の生活実践ならびに読み手(研究者)の教育学関心に関連づけること、という二段階で進められる(Müller 2014: 81f.)⁴⁾。次節では、このようなテキスト分析の方法に依拠しつつ、同時にまた、インタビューにおける語りは語り手と聴き手との相互作用のなかで構成されるという点も視野に入れながら、ビオグラフィ・インタビューに含まれる人間形成的な意味形象を明らかにしたい。

2. ビオグラフィ・インタビューの人間形成的な意味形象の再構成

(1) インタビューの概要⁵⁾

インタビューは「ケンタ」さん(仮名)。兵庫県に生まれ、現在は首都圏に在住する30代の男性である。インタビューは2019年11月に首都圏の国立A大学の教室で行われた。インタビュアーは同大学の教員(40代、女性)が務めた。インタビューは同大学の卒業生で、在学中にはインタビュアーとわずかながら面識があった。大学卒業後に対面するのはインタビュー時が初めてであった。インタビューは、最初に生成質問として、仕事という主題に関わる半生を自由に語ってもらい、その後でいくつかの補足質問を行う半構造化インタビューとして実施された。インタビューの実施に先立ち、研究倫理に関する事項を説明し、文書による了承を得た。インタビューの最中、インタビューは終始ハキハキした爽やかな口調で語っていた。インタビューの総時間は1時間14分であった。

インタビューにおける質問と語りの内容(要旨)は以下のとおりである。

質問1 仕事について最初に意識した経験や出来事を思い出してください。そこから始めて現在に至るまで、仕事に関わってあなたにとって重要と思える出来事や経験を話してください。

- ・大学卒業の時、音楽を仕事にできたら一番いいと思い、就職活動はせず、焼肉屋のアルバイトを続けた。その後、オーナーから正社員になることを勧められ正社員になった。自分のなかではアルバイトの延長という意識だったが、店長から、指示された仕事だけをこなすのはいかがなものか、という話を何度かされ、自分がしている仕事を見つめ直す機会になった。
- ・正社員になった後も音楽活動は続けており、やはり音楽を仕事にしたい気持ちがある。ただ、今の焼肉屋の仕事は必ずしもやりたくない仕事ではない。自分のなかでは「人を楽しませたい、笑顔にしたい」という思いが一番強く、それは今の仕事でも実現できる。その思いを実現できる仕事であれば職種は関係ないのかなと思う。しかし音楽を諦めきれないのは、また別の要因があるのかなと思う。
- ・特定の仕事をしたいという思いはあまりない。人を笑顔にしたいという動機なので、いろいろな職種が考えられる。小学校の時から「人と接する仕事がしたい、相手を笑顔にしたい」と思っていた。最初の夢は小学校5年生の頃、好きだった女の子の出身地である沖縄で警察官になって地域の人に喜んでもらいたかった。人から嫌われるのが嫌で、八方美人だと最近思う。人を笑顔にしたいという気持ちの裏返しなのかなと思う。
- ・中学校3年生の頃から音楽でいきたいと思い、高校3年生の時には音楽の専門学校に行こうと思った。親や音楽スタジオの店長から、大学のほうがいろいろな考えをもった人と出会えると言われ、一応大学に行くことにした。学校の先生と仲がよく、生徒である自分にとって先生は大きな存在だったことから、音楽ができなかったら教師になろうと思い、教育学部を受験して入学した。
- ・小学校の時は音楽ではなく野球をしていた。中学校の時、昔フォークソングをやっていた父親がギターを買ってきた。ギターに触ると結構楽しく、やがてエレキギターを買ってもらい、音楽にどっぷりはまった。中学、高等学校の部活は吹奏楽部だった。音楽が仕事になれば、本当にやりたいことが仕事になるのかなと思う。演奏したいジャンルはロック系の音楽。今は、ドラムやベースをパソコンで作り、それに合わせてギターを弾くスタイルで、主にポップスロックを1人でやっている。
- ・高校の時はバンドで、大学の時は1人で音楽をやっ

ていた。ただ、大学時代は気持ちのなかでしか音楽をやりたいという思いがなかった。卒業後、本当にやろうと思ってやり始めたのが音楽配信アプリ。その後、出会いが増え、ライブハウスに出たり、イベントに呼んでもらったりしている段階である。音楽配信アプリはイベントで競い合うことができ、課金で生活できるくらい稼いでいる人もいる。家にいながら仕事として成り立つツールができていくことはすごいと思う。行き過ぎているところもあると思うが、時代の流れを感じる。大変な部分はどの仕事でもあり、大変さのほうが大きくなったら仕事を見直すのだと思う。

- ・アプリ配信だけで生活したいとは思わない。アプリ配信では相手の顔が見えず、楽しくない。ライブでお客さんが喜んでる姿を見るほうがいい。〔「ライブではみんなが喜んでくれるわけではないのでは?」という問いに対して〕だから誰からも嫌われたくない、万人受けするような音楽をやっているのかなと思う。
- ・音楽は先が見えず、焼肉屋も一番やりたいことではない。音楽を仕事にできなかったら一番やりたいのは教師という思いは変わっていない。教員免許状更新の期限までに、どこかで音楽に見切りをつけたいといけなかなと最近思い始めている。教師は魅力的な職であり、もし教職に就けるのであれば、趣味として音楽をやっていく生活に変えてもいいかなと、今悩んでいるところ。非常勤講師も選択肢に入っている。

質問2 これまでの人生を振り返って、自分や他者、社会に対する見方が大きく変わったという出来事や経験がありますか？ つまり「転機」と呼べるような経験がありますか？ それは職業に関わることでしたか？

- ・小学校6年生の卒業直前に、友達との遊びの約束のことで、孤立してしまう事件があった。今までの自分のあり方を改めない、と思ったのが、最初の大きな転換期。
- ・社会に対しては、高校の時の校則が厳しく、「大人の都合で社会は決められるんだ」と思った。
- ・大学1年の時、音楽の最終審査まで行った時に、全面的にお金の話をされ、「結局お金なんだ」と失望した。人を笑顔にしたいといったことだけでは社会は動いていない、とその時思った。焼肉屋の店長との出会いからも、お金にシビアにならなければと思うようになった。現在、給料は結構音楽に使っており、音楽のために働くという構図ができあがっている。

質問3 学校で、授業や人間関係などを通して学んだことは今の生活に役に立っていますか？

- ・人をパターンに分けて接し方を考えるようになった。決めつけにならないよう気をつけ、パターンは更新されて増えていく。相手が一番気持ちよくいられる状態を作らなければ、と心がけている。自分が孤立せず、相手に自分といたいと思ってもらいたいという思いがある。このインタビューも初めての経験なので、「研究に使える話をしないといけない」と思いながら話している。まだまだ成長中である。
- ・孤立する前は、単純におもしろいことをして喜んでもらいたいというだけだったかもしれない。孤立した時以降は、自分のことを認めてもらいたい、みんなと一緒にいさせてほしいという思いが付与された可能性はある。孤立した後は、より視野が広がった。確かに考え方は変わった。
- ・〔上で語られた「成長中」とは?〕という問いに対して] 自分のなかに「こういう人間になりたい」という目標がある。そこに行くために、今自分が何をしなければならぬかを、今すぐく探している状態である。最近、自分との会話を改めてやり直し、自分の思いや考えの理由を改めて考えるようにしている。死ぬまで、多分考え続ける。よりよくなっていきたい、そのためにはどうしたらいいか、変化があるから課題が出てくる。目標設定はそのつど絶対にしたほうがいい。できていない自分に、ダメだなんて思うが、できないからこそ自分なのかなと思う。しかし目標設定する自分のほうがいいという思いもあり、難しい。

質問4 仕事をしていく上で、一番重要だと思うことはどういうことですか？

- ・ふたつある。ひとつはやりがい。それにつきる。モチベーションにつながる。もうひとつはお金。やりがいと同じくらい大事。やりがいとお金を天秤にかけて働くのではない。

質問5 現在大学生活を送っている後輩たちに伝えたいことがあったら教えてください。

- ・自分との会話をもっと増やしてほしい。大学時代は意外と一人の時間がない。気づいたら卒業や就活、となるよりも、自分と向き合って、今の自分の生活ややりたいことについて問うてほしい。
- ・ここで言う会話とは、ある物事に対して考え得る物事をより多くしていく作業と、それを精査する作業を同時進行させること。時間は短時間でいい。今はその時間を持っていない。だからこそ持ちたいのかもしれない。一人でいる時間に自分との会話をしたい。

(2) 人間形成的な意味形象の再構成

①職業選択の途上にある音楽を愛する若者

ケンタさんの語りからは、まず「職業選択の途上に

ある、音楽を愛する若者」という意味形象を読み取ることができるだろう。ライフステージの観点から見れば、ケンタさんは現在、学校から仕事への移行の途上にある。ケンタさんは、たしかに社会的には飲食店の正社員という身分をもつものの、職業的アイデンティティの基礎はそこに置かれておらず、音楽活動を仕事にするか、それとも教職に就くかの選択の途上にある。コラーの理論を踏まえるならば、学校教育のステージと職業生活のステージに挟まれた、ある種の危機の時期にある、と捉えられるかもしれない。もっとも、ケンタさんの場合、この「危機」としての移行期が自己と世界との関係の変容をもたらしているのかどうかは、明瞭には読み取れない。たしかにケンタさんは、主たる職業生活の基盤を音楽活動に置くか、教職に置くかで悩んでいるのだが、その悩みは、音楽を趣味とするのか仕事とするのかをめぐる、自分の決断の問題として語られており、その悩みを通して世界との関わり方が変容している様子を見て取ることは難しい。

他方、仕事という世界との相互作用について見れば、その相互作用を経て世界との関わりが変化したことが語られている。例えば、インタビューの冒頭で、ケンタさんは、現在の飲食店で仕事に対する意識の変化について語っている。すなわち、指示された仕事だけをしていればいいアルバイトの意識から、主体的、積極的に仕事をするのが求められる正社員の意識への変化である。他律的な意識から自律的な意識への変化と呼んでもいいかもしれない。この語りの直前、インタビューの開始に先立ち、インタビュアーは「仕事と人間形成についてのインタビューを始めます」と言ってインタビューを始めていた。この「仕事と人間形成」という主題に関わってケンタさんの念頭に上記の意識の変化がまず浮かび、それが語られたのかもしれない。また、インタビューのなかで、生きていく上では夢だけでなく「お金」という現実的な条件が重要であることを徐々に認識するようになってきたことも、何か所かで語られている(具体的には、学生時代に音楽のオーディションを受けた時、および現在の勤務先の店長との会話のなかで、そのように認識したとのことである)。このような語りは、仕事という世界との出会いや相互作用を通して、ケンタさんの自己意識が脱中心化し、より省察的になっていく過程を表したものと解釈することができるだろう。

ケンタさんを比較的長い職業選択の過程に置いている大きな要因は、音楽である。音楽はケンタさんにとってもっとも「やりたいこと」であり、人生のなかでもっとも大きな比重を占めている。現在のケンタさんは、音楽を正規の仕事にするのか趣味として位置づけるのか、の岐路に立っているものの、仮に趣味として位置づけられたとしても、ケンタさんの生きがいやアイデンティティの主たる基礎は仕事ではなく音楽に置か

れるように思われる。音楽との出会いは中学生の時に父親がギターを買ってきたという偶然の出来事であったが、横槍のように生じた小さな出来事は、その後、職業選択の第一候補となる程度にまで、ケンタさんの人生を大きく方向づけることとなった。ケンタさんと音楽との関わりには二重性がある。すなわち、自分が好きなこととしての音楽と、人を笑顔にする媒体としての音楽である。以下でも考察するとおり、ケンタさんの行動原理のひとつに「人を笑顔にしたい」というものがある。また、その動機のゆえに職種の選択肢はさまざまに考えられる(すなわち、必ずしも音楽を仕事にしなくてもよい)、と語られている。その一方で、「でも、やっぱり音楽が諦め切れないうってのは、何かしらのまた別の要因があるのかなとは思ってます」とも語られている。その要因が何であるか、ケンタさん自身にも判明していないものの、音楽が好きだから、という理由が大きいことは疑いえないだろう。音楽という「好きなことで、生きていく」(世界的に利用されているある動画共有サービスの有名なキャッチフレーズ)ことにどの程度の実現可能性があるのかについては、インタビューのなかでは詳しく語られていない。音楽で生きていきたいというケンタさんの意識—少なくともその一部—は、音楽配信アプリという現代の技術的条件によっても形作られ支えられていると言えるだろう。大学を卒業する時に「音楽を仕事にできたら」と考え一般的な就職活動をしなかったことから、趣味の域を超えた音楽の技術をもっていることが推し量られるが、他方では音楽は「先が見えない」とも語られている。「音楽を仕事にできなかったら教師になりたいなのは、改めて思うとやっぱ変わってない…。それ(=教員免許状の有効期限が切れる)までに、どこか音楽のほうを見切りをつけないといけないかなっていうふうには、最近ちょっと思い始めてまして」と、最終的にはどこかの時点で現実的な判断にもとづいて職業を選択していく見込みであることが語られている。

音楽と職業選択という側面から再構成されるケンタさんの人間形成の過程は、音楽を愛するひとりの青年が、生きていくための経済的な基盤(お金)という現実を徐々に認識し始め、音楽で生きていくのか否か思案している最中にある、という形態として描けるかもしれない。もっともそれは、危機とその克服を通じた世界関係の変容というプロットを基礎とした描き方であるとも言えるだろう。先に、ライフステージの観点から見るとケンタさんは学校から仕事への移行の途上にある、と述べたが、このような捉え方は、各ライフステージにおける世界関係の安定と、ステージ間におけるそれらの関係の不安定、という捉え方を前提としたものである。実際には、安定していると見えるそれぞれのステージにおいても世界関係の危機と更新は生

じうる。実際、すぐ後に見るように、ケンタさんの世界関係は小学校時代のある事件によっても大きく変容している。同様に、自己意識が脱中心化し省察的になることを人間形成の特徴として取り上げる解釈にも、伝統的な人間形成理解が影響を及ぼしている。演奏技術の上達といった、ある能力の向上や増強を人間形成の重要な要素に数え入れることは可能であるし、脱中心化した、より広い世界関係の枠組みの獲得による問題解決能力の向上という弁証法的発達の構図とは異なる意味形象を—これもすぐ下で見のように—インタビューにおける語りから再構成することも可能だろう。

②他者からの承認と自分との会話に牽引される人生

ケンタさんの語りから再構成できる第二の意味形象は、「他者からの承認と自分との会話に牽引される人生」と名づけうるものである。ケンタさんのインタビューでは「人を楽しませたい、笑顔にしたい」という言葉が頻出する。最初に出現するのは、インタビューの冒頭、職業選択について語っている文脈のなかの、「多分、自分の性格の中で、今までその生きてきたなかで、その、人を楽しませたいとか、えー、人をこう、笑顔にしたいっていう思いが一番あるんですけど」という語りである。「人を楽しませること、笑顔にすること」は、ケンタさんの生き方のひとつの基本的な規準として作用していると見ることができる。

この規準と並んで、ケンタさんの他者関係の大きな転機となった出来事として、小学校6年生の時の「孤立事件」が語られている。卒業前に仲良しグループから公園で遊ぶ話が持ち上がったが、習い事があったために一緒に行かなかった。しかし習い事は休みだったため帰宅すると、別の友達から公園で遊ぶ誘いの電話がかかり、そちらに行くと、同じ公園で仲良しグループと鉢合わせしてしまい、双方にうまく説明できなかったこともあり、その後自分ひとりだけ孤立してしまっただけという出来事である。この出来事のなかでケンタさんは、「今までのその自分の在り方とかを、ちょっと改めない」「他人に自分がどう見られるかっていうのももっとちゃんと考えないと」と強く考えるようになった。「人を楽しませたい」という思いについても、その出来事の前は「単純に面白いことをして喜んでもらいたっていただけだったかもしれない」のに対し、その出来事以降は、「自分のことを認めてもらいたくないんですけど、その、みんなと一緒にいさせてほしいとか、って思いがもしかしたら、そこにちょっと付与された可能性はあります」とも語られている。この出来事を通して、「他者から自分がどう見られているか」という方向性の視点が獲得されたことと見るができる。あるいはそれ以上に、「自分を受け入れてほしい」という承認の要求がそこには含まれている。この出来事はその後も影響を持ち続けており、それは例えば、音楽活動において「誰か

らも嫌われたくない」ために自分の演奏したいハードな曲も「万人受けしそうな感じに仕上げる」、あるいはステージでの振る舞いも「キャラ立てをし過ぎない」といった形で表れることになる。

この「孤立事件」は、「自分の存在が他者から認められ、受け入れられてもらえること」という生き方の規準をケンタさんに与えることになった。この規準はたしかにケンタさんの視野を広げ、その後の振る舞いを強く規定する転機となった。けれどもこの危機の経験については、すでに克服された後の人生に統合された過去の出来事というよりも、今なお折に触れて繰り返しケンタさんを襲い、自己と他者との関係の安定を脅かす仕方で機能している、という捉え方もできるだろう。他者が自分の存在を認め、受け入れてくれるかどうかは、自分の側では制御できない。他者の制御不可能性は自己を不安定にさせる。ケンタさんは、「やっぱり1人の時間でしか考えられないとか。[…]例えば何か2人でいて、お互いの話をこう、会話でキャッチボールをしているときは、そんなにこう、考えを巡らせないのかな」と語り、一人でいる時に行う「自分との会話」を重視しているが、このこともまた、制御不可能な他者のいない一人の時にこそ安心して自分と会話をし、自分の考えを整理することができる、という含意をもっているのかもしれない。

また、インタビューのなかで自己の成長ということについて問われたケンタさんは、自分のなかに「こういう人間になりたい」という目標があり、そこに行くために今自分が何をしなければならぬかを、自分と会話しながら探している状態だと語っている。その場合の目標について、インタビューアの「なりたい自分は、何十年先ぐらいまでのイメージを持ってるんですか?」という問いに対して、ケンタさんは即座に「ああ、そのイメージはもう、死ぬまでみたいな感じですかね。何か、死ぬまで、多分考え続けるかなっていうふうに思うんですけど」と答えている。これは、人生の最終的な目標が明確にイメージされているという意味ではなく、日常の些細なことでもそのつど「なりたい自分」のイメージがあるということだと説明される(例えば、演奏について、インタビューでの受け答えについて、職業選択について、ニュースのなかの登場人物に対する判断について、等々)。他方でケンタさんは、「なりたい自分になれない自分」がいることも認めており、「なれない自分」の存在を必ずしも否定しているわけではない。生成質問に対する語りは、「例えば1人にいるときに、[…] そうじゃいけないって思ってる自分もいるので。だから何とか前向いて、じゃ、目標設定やっついこうと。でもできない。ま、でも、それも俺だしなっていう感じで受け入れたりと。うーん、何かでも、そうですね、うーん、難しいですね」という言葉で結ばれている。

ケンタさんの語りから再構成される人間形成の形態は、約束された調和的な統合に向けて弁証法的に進んでいく過程というよりも、そのつどの目標によって牽引される過程の不断の反復として描くのがふさわしいように思われる。後から振り返ると、前の段階における危機（例えば「孤立事件」）は後の段階での成長や向上にとって意味ある出来事だったとして意味づけられ、筋立てて語られるかもしれないが、そうした発達の筋立てとは異なる、「反復の機制」とでも呼ぶような人間形成の機制を、ケンタさんの語りから読み取ることができるだろう。

3. おわりに—反省的—規範的な人間形成論の意義と課題

以上、ケンタさんの語りから、人間形成に関わる二つの意味形象の再構成を試みた。第一の意味形象は世界関係の側面に重点を置いたもの、第二のそれは他者関係と自己関係の側面に重点を置いたものであると言ってよい。もっとも、このような重点の置き方はあくまで相対的なものであり、ケンタさんのなかではこの二つの意味内容は相互に関連しあっている（職業選択においても自己との会話が重視されている、といった仕方）。

カラーの理論を踏まえるならば、ケンタさんは、例えば仕事の世界との出会いや小学校時代の「孤立事件」をきっかけとして、世界関係と自己関係の形態を変容させていった様相が見て取れる。これに加えて、内在的に機能する規範の観点からケンタさんの語り（目標設定やそれを踏まえた自己との会話など）を分析するならば、弁証法的な発達としての人間形成概念とは異なる、「反復の機制」からなる人間形成概念とも呼べるものを再構成することができたと思われる。もちろん、ケンタさんの価値志向に対しては賛否両論がありうるし、分析の視点に無意識的に含まれている規範性に対してもさまざまな異論がありうる（もっぱら変容や反復に人間形成を認めることは適切なのか、弁証法的な人間形成モデルの批判に結びつけることは妥当なのか、等々）。しかしながら、テキスト分析に反省的規範性という視点を持ち込むことで、形式的、構造的な形態の分析がもつ研究主体と研究客体の二元論をある程度まで克服し、技術的な対象操作に転用されない人間形成概念を提示することが可能となる。この点に、反省的—規範的な人間形成論の意義を求めることができるだろう。

先に論じたように、反省的—規範的な人間形成論が再構成する人間形成の概念は、事例比較を通してある程度の類型化は可能であるかもしれないが、一般化はされえない。またBOB研究者は経験の理論化と一般化が含み持つ暴力性に対して省察的でなければならない

い。この意味では、反省的規範性を視点に入れて再構成された人間形成の概念は、抗争に対して開かれたものでなければならない。この開放性を担保し続けることが、反省的—規範的な人間形成論の課題であると言えるだろう。

註

- 1) ここでの記述には拙稿（野平 2020）の一部を取り入れていることをお断りしたい。
- 2) フックスもまた、人間形成が経験的現実のなかでどのように生じているのかを人間形成論の立場から解明する、という仕方での理論と経験との媒介には意義があると見なしている。ただしその場合でも、人間形成論には、研究上の根本確信が「自他を欺く強制となることを防ぐために、自らが掲げる要求の限定と自らが根本に置いている確信に対する懐疑」（Fuchs 2011 : 136）が必要であると述べている。
- 3) ミュラーは例えば、「なぜ私たちは、精神分析からロマン主義を経てマイスター・エックハルトやアウグスティヌスに遡る文化史にしたがって、人間形成を「自己自身への回帰」[...]と捉えてはならないのだろうか」と述べ、「変容」というカラーの一見価値中立的で事実的な人間形成概念にも内在的な規範が作用していることを指摘する（Krinninger/Müller 2012 : 60）。
- 4) ミュラーによれば、それぞれの段階の具体的な分析の観点は例えば次のようなものである（Müller 2014 : 82）。第一段階：語りからはいかなる社会的実践の形式が読み取れるのか？テキストはいかなるシンボリック、文化的な意味内容を表すのか？この意味内容は、生と人間形成の過程、主体の生成、生の遂行と形式をいかに説明するのか？第二段階：再構成されたテキストの意味内容は、語り手にいかなる意味をもつものとして理解されているのか？テキストはどのような生活世界の意味の地平を表すのか？テキストに内在する人間形成的意味は、そのテキストのもととなる世界にどのように関連づけられるのか？
- 5) ここで事例として取り上げるインタビューは、現代における学校から仕事への移行の長期化、複雑化と人間形成との関わりを解明することを課題とする、ある研究プロジェクトの一環として行われたものである。仕事の話が語りの大部分を占めているのはそのためである。

文献

Fuchs, Thorsten (2011) : Vermitteln, Verknüpfen, Verbinden? Ein Beitrag zur Reformulierung der bildungstheoretisch orientierten

- Biographieforschung. In : Breinbauer, Ines Maria / Weiß, Gabriele (Hrsg.) : Orte des Empirischen in der Bildungstheorie. Einsätze theoretischer Erziehungswissenschaft II. Würzburg (Königshausen & Neumann) , S.124-139.
- Fuchs, Thorsten (2014) : »Das war das Bedeutendste daran, dass ich mich so verändert habe.« Mit Ehrgeiz und Ansporn über Umwege zum Ziel - der ›Bildungsweg‹ Hakans. Oder: Ist jede Transformation des Welt- und Selbstverhältnisses sogleich bildungsbedeutsam? In : Koller, Hans-Christoph / Wulfange, Gereon (Hrsg.) : Lebensgeschichte als Bildungsprozess? Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung. Bielefeld (Transcript) , S.127-151.
- Koller, Hans-Christoph (1999) : Bildung und Widerstreit. Zur Struktur biographischer Bildungsprozesse in der (Post-) Moderne. München (Wilhelm Fink) .
- Koller, Hans-Christoph (2012) : Bildung anders denken. Einführung in die Theorie transformatorischer Bildungsprozesse. Stuttgart (Kohlhammer) .
- Koller, Hans-Christoph / Wulfange, Gereon (2014) : Einleitung. In : dieselbe (Hrsg.) : Lebensgeschichte als Bildungsprozess? Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung. Bielefeld (Transcript) .
- Koller, Hans-Christoph (2016) : Ist jede Transformation als Bildungsprozess zu begreifen? Zur Frage der Normativität des Konzepts transformatorischer Bildungsprozesse. In : Verständig, Dan / Holze, Jens / Biermann, Ralf (Hrsg.) : Von der Bildung zur Medienbildung. Wiesbaden (Springer) , S.149-161.
- Krinninger, Dominik / Müller, Hans-Rüdiger (2012) : Hide and Seek. Zur Sensibilisierung für den normativen Gehalt empirisch gestützter Bildungstheorie. In : Miethe, Ingrid / Müller, Hans-Rüdiger (Hrsg.) : Qualitative Bildungsforschung und Bildungstheorie. Opladen/Berlin/Toronto (Barbara Budrich) , S.57-75.
- Müller, Hans-Rüdiger (2013) : “Wertvolle” Resultate? Zur Normativität im erziehungswissenschaftlichen Forschungsprozess. In : Fuchs, Thorsten / Jehle, May / Krause, Sabine (Hrsg.) : Normativität und Normative (in) der Erziehungswissenschaft. Einsätze theoretischer Erziehungswissenschaft III. Würzburg (Königshausen & Neuman) , S. 39-50.
- Müller, Hans-Rüdiger (2014) : “Aufstieg durch Bildung” . Versionen der Selbstbeschreibung im Interview mit Hakan Salman. In : Koller, Hans-Christoph / Wulfange, Gereon (Hrsg.) : Lebensgeschichte als Bildungsprozess? Perspektiven bildungstheoretischer Biographieforschung. Bielefeld (Transcript) , S.79-101.
- 野平慎二 (2020) : 「言語と人間形成ー人間形成論的方向づけられたバイオグラフィ研究の視角から」, 日本デルタイ協会『デルタイ研究』31, 21-38頁。
- リクール, ポール (久米博ほか訳) (1985) : 『解釈の革新』白水社。
- リクール, ポール (久米博訳) (2004) : 『時間と物語 I 物語と時間性の循環／歴史と物語』新曜社。
- 付記 本研究の実施にあたり, JSPS科研費 JP19H01632 および JP20K02427 の助成を受けた。

(2020年9月23日受理)